

入賞

勲章より重かったもの

岩出第二中学校 3年 岩倉 心音

遺書を書いた手で勲章をつけたのだろうか。ひいひいおばあちゃんの家の奥の部屋に、その軍服は今も残されている。色あせた布。固くなった袖。軍服のそばに、いくつもの勲章が静かに並んでいる。その前に立つとなぜか息をひそめてしまう。

ひいひいひいおじいちゃんは、戦艦の艦長として戦争に出て、帰ってこなかった。出撃の前、4人の子供達に遺書を残していたという。その話をしてくれたのは、ひいひいおばあちゃんだった。縁側に座り、蝉の声を聞きながら、ぼつりぼつりと語ってくれた。手ひらで、そっとひざをなでながら。声は穏やかだったが、その視線は遠く、今ではない時間を見ているようだった。「子供達のことを本当に可愛がっていたんだって。」そう言って少しだけ笑った。そのやわらかな表現の奥に、言葉にならないものが残っているように見えた。自分のお兄さんを特攻隊で亡くしていた戦争は、ひいひいおばあちゃんにとっても決して、他人事ではなかったのだ。子供を愛していた父親が、我が子に別れの手紙を書かなければならなかった。その事実を前に、私は言葉を失った。

どんな思いで書いたのだろう。名前を呼ぶその一行を。震える手？それとも静かに覚悟を決めた手？私には想像することしかできない。それでも想像しなければならないと思った。多くの命を背負う立場にあった人が、1人の父親として遺書を書いた。「行ってきます」ではなく、「さようなら」になるかもしれない言葉を子供に向けて。私は戦争は「命令」で終わらず「家族」に続いていたものだと思います。勲章は、勇気や功績の証だと言われる。けれど私には、それが別のものに見える。戻れなかった日常。帰れなかった家。待ち続けた家族。それらすべてが、音もなくそこに置かれているように感じるのだ。

私達は戦争の時代を生きてはいない。今の私の日常は、誰かが帰れなかった日常の上にある。その1人がひいひいひいおじいちゃんだった。朝ご飯を食べて、学校へ行って、

友達と笑い合う。そんな当たり前の1日が、誰かの犠牲の上に成り立っていると知った時、私はその重さを受け止めきれなかった。でも今は思う。重さから目をそらさないことが、大切なことだと。もし、今の私を見たら、勲章を誇れと言うだろうか。私はそうは思えない。きっと何も言わず、ただ静かに、私達が当たり前だと思っている日常を見つめ、「同じ覚悟を次の世代にはさせないでほしい。」と願っているのではないだろうか。

戦争を体験した世代が少しずつ少なくなっている。やがて、語れる人がいなくなる日が来る。だからこそ、21世紀を生きる私が、記憶をつないでいかなければならないのだ。記憶は語り継ぐことでしか生き続けられない。できることは、身近なところにある。ニュースで戦争の話を聞いた時、その数字の一人一人に家族がいることを想像する。私にはその想像を現実として語れるひいひいひいおじいちゃんの話がある。友達や家族にひいひいひいおじいちゃんのことを伝え続けることが、平和の確かな一歩になると私は信じている。戦争は、突然始まるものではない。無関心やあきらめ、命を数字で考えてしまう心が、少しずつ積み重なって起こるものだと思う。だからこそ私は、ひいひいひいおじいちゃんを英雄としてではなく、遺書を書かなければならなかった1人の人間として、伝え続けたいのだ。勲章より重かったもの。それは、命であり、家族であり、帰りたかった、ただの日常だった。ひいひいひいおじいちゃん存在を私は忘れない。語り継いでいくことが、今を生きる私にできる唯一の感謝であり、21世紀を生きる私に課された使命だ。